

飢饉

江戸時代には長雨、水害、日照り、虫害などで凶作となり、たびたび飢饉が起きました。このうち享保・天明・天保の飢饉が三大飢饉と呼ばれています。今回は松山市の享保の飢饉と徳島市の天保の飢饉を取り上げます。

■享保の飢饉（愛媛県松山市）

享保 17 年（1732）、松山地方では 5 月 20 日頃から天候が不順となり霖雨が続き、降り続いた雨のため、海岸部の水はけのあまり良くない地域では麦が凶作となり、7 月中旬には稲も腐敗するものが出て、さらにウンカが発生して稲だけでなく雑草まで食い尽くに至りました。このため、町方、農村とも人々は飢えに苦しみました。松山藩では 5,700 人余りが餓死し、堀江村（現松山市）では村人 800 人余りのうち半数以上が餓死しました。松山市堀江町の光明寺前には供養塔と追遠之碑（享保飢饉餓死者 150 回忌碑）が建立されています。藩が堀江の港に救援物資を運ぶというので、人々は争って港に集まりましたが、船が着くのを待ちかねて飢え死にする人も多かったそうです。＜愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史近世上」1986 年、松山市史編集委員会編「松山市史第 2 巻」1993 年＞



光明寺前の供養塔



追遠之碑



(地理院地図に加筆)

■天保の飢饉（徳島県徳島市）

天保 8 年（1837）、長雨が続き、農作物の被害が甚大で、県南地方では 50 年来の洪水となりました。県下一般に餓死する者が多く、木葉を摘み、木の実を拾い、曼珠沙華の根を掘り食わずかに命を繋ぐ有様でした。徳島藩は米倉を開いて窮民を賑救し、名東郡では 8 月から 10 月に至る 50 日間、新居村（現徳島市）不動前並びに高崎村（現徳島市）の鮎喰川河原に小屋がけをして焚き出し施米をしました。施行を受けた人数は延べ 78,620 人と記録されており、徳島城下と周辺村々はもとより、西は美馬・三好郡、南は那賀・海部郡からも来ました。徳島市不動本町の密厳寺には、天保の飢饉で亡くなった 144 人の霊を弔うために供養塔が建てられています。＜徳島県史編さん委員会編「徳島県史第 4 巻」1965 年、徳島市史編さん室編「徳島市史第六巻」2020 年＞



密厳寺の天保飢饉供養常夜灯



密厳寺の天保飢饉供養塔



(地理院地図に加筆)